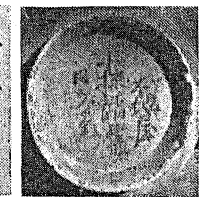


北幡大正町の民俗二題

伊与木 定

(1) 木地師のこと

木地師といっても今日では知らぬ人も多いが、木地師とは一家眷族と共に高山の奥深く住み、一般の百姓町人達とは交りをせず深山に小屋がけて暮らして、木で茶碗や皿などの形に似た木地をくって、それを家族の者に持たして里へ出て売るのを業としていたのである。



三十年前八十三才で死んだ祖母の話によると、木地一個の代価は一升の枡量が入る木地を代米一升、五合の枡量が入るものを代米五合であったということである。

原料の木材はケンポーやケヤキのような逆もげのしない材を用いたものだ。その原料木は自由に深山の奥、官林で伐り取る事を許されていた。諸国の関所も通行自由な往来手形を交付されておった。木地師は一つの団結をつくり、全国の深山に足跡を残しているが、ことわざにも「木地屋の宿替」といわれるように全く住所不定で村人とも交渉せず、正式



次男氏以下お客さん達二十名位を迎え入れる。

昔は紋付羽織袴であったが当今は和服あり洋服ありである。乙組全員着席して、お汲み茶を出す。次に二つの膳付の皿鉢料理が出て客人の前に並べられ、酒が出る。

甲組当頭芝竹治氏から「太夫さん当頭(甲組)さんお客さん達よくお出でくださいました、粗末なものでありますがお召し上り下さいませ」との挨拶があり、酒宴が始まる。それには部落の若い娘の子達が出てお酌をする。

宴なかばに据えつけの本膳を各客人の前に配る。甲組当頭より「太夫さん据えつけの準備をしました。当頭さん据えつけのかまをいたしました、皆さんお召し上りくださいませ」との挨拶がある。そこで客人達は御飯一ぱいと汁一碗をいただく。終って甲組当頭芝氏が盃二個を持って、太夫さんと乙組当頭に献じ、他の客人は手もとの盃に「中ざし」をお受けください、との挨拶があり、酒を一っぱいづく。またお酒がつづく。その席の中へ若者三名が赤だすきで各々一個づつ飯櫃を持ち出して来る。この飯櫃には米一斗二升位を炊いた白飯はいっておる。

これより客人達の本膳にある、先刻御飯を食べたお椀にそれぞれ皆飯を盛りたて盛りたてて大山盛りにして、お膳に並べる。(もち米が少し入っておれば、なお高く盛り上げられるという)。

終ってから当頭芝氏より「例によりまして掛飯の祝儀を致しました、太夫さん当頭さん掛飯の祝儀を致しました」との挨拶がある。つづいて当頭より盃三個に小皿を添えて太夫と乙組の当頭に献ずる酒がつがれる。乙組当頭より祝儀を述べたいとの挨拶があつて、盃を甲組当頭にもどされ、太夫と当頭より謡が出る。

に婚姻もしない。その墓は深山の奥に集まってあるが、石碑も無いのが普通である。幡多郡上山郷(現在大正町)には葛籠川の奥、

官林一ノ又山に木地川原という所がある。ここには昔木地師が居たと伝えられ其の墓も現在残つて居る。中津川の奥、官林小松尾山林内にも木地師の墓があり、木地の駄馬というホノギもある。ここは屋敷のあった跡であろうと思う。下津井の坂島の官林内にも木地屋の名称が残つて居り、同所仁井田神社の幟り入れの木箱の蓋にも坂島の木地師より幟を寄進したことを示す記録がある。

四手ノ川永井さんの奥狗子山官林の入口にも、木地山という所があつて、森中徳太郎翁(83)の母親が若い時分に、木地師がいて、木地をくってはそれを売ったことを見たという話である。

折合の三所権現神社には木地屋小椋清蔵同文左衛門の文字が木地椀の糸じりにあるものがある。

以上で、上山郷の官林内には、昔はたくさん木地師が住んでおつたことが想像されるわけである。(写真は木地師の免許状と木椀)

(2) 当屋祭(飯食い祭)

幡多郡上山郷上分下道村(現大正町下道)という部落は、昔は戸数凡十四位の山間の小聚落であつたことが州郡志に見えている。

昔から毎年旧十一月十二日、産土神春日神社の霜月祭当日に行われる当屋祭の行事は、昔の姿をそのままつたえていて、酒道具膳椀等も昔のおもかげを残している。

そのしきたりは、部落戸数を二組に区分して各組に当頭一名を選んで、その差配によつて行事を進めるのであるが、昭和三十三年霜月の当屋祭は、甲組当頭芝竹治氏の差配で、当屋野並伴次方で準備万端を整え、お客側を待ち受ける。午後五時頃客側の乙組当頭吉村

長生と高砂と松高きの式三番を唱和する。終つて甲組当頭芝竹治氏よりありがとうございますと礼を述べる。それからはよさこいとなり、「ぼたもちが」の唄が出る、みんながうたい、盃も交換も盛に行われ宴もたけなわとなる。

次に本膳の山盛り飯の蓋をとつて、飯に箸をつけるが、なかなか食べられない。しかし中には二杯位食べる豪の者もある。食べられない者は紙をもらつて包んで持ち帰ることにする。決して食べ残したり捨てたりはしてならないことになっている。

それより御飯のすんだお椀に三杯御酒を受けていただくのである。それが終つてから客側当頭より、甲組当頭芝竹治氏に盃を献じて、謡にうつる。浪波津の一節を謡うが、それからはまた雑歌となつてひとしきりさわぐ。御茶が出る。次に御湯が出る。これは飯を摺りつぶした白い汁である。以上でこの日の当屋祭りは終り、客人達は「当頭さん御馳走になりました」との挨拶をしながら一同つれだつて出て行き一人残らず帰つてしまふ。後に残つてぐずつく客は一人もない。食糧不足をつげておたがいが苦勞した戦時中もこの行事は続けられて今日にいたつている。

現在も神田というものがあつて、その収穫によつて年々の白飯行事がつづけられて今日にいたつている。

(写真は飯食い祭風景)

(前町会議員)

